

世界帝国主義の暗闘に抗し、プロレタリア世界革命の最前線へ

游撃

号

月一回発行

1975. 9. 11

定価 20円

共産主義者同盟
游撃編集委員会

東京都世田谷区千歳郵便局
振替東京〇一九五七八三

9・14-15日韓定期閣僚會議粉碎
9・30天皇派米阻止闘争へ全力量
を挙げて進撃せよ！

日帝、朴政権のアジア反革命秩序形成策動を打ち砕け！

六〇年代から七〇年代にかけて全世界を席巻した革命勢力の前進は、今日、ベトナム・インドシナにおける民族解放・社会主義革命勝利の地平へと到達するに至っている。ここに戦後帝国主義世界秩序は決定的に解体への歩みを深めた。既にもはや帝国主義諸国間の矛盾と相乗して、ブルジョア的世界秩序の基礎構造たるドル・ポンド機構、IMF体制の崩壊は、世界経済を恒常的「危機」に陥れている。世界史は不可逆的に推転しつつある。

こうした帝国主義世界の国内外に於ける政治的・経済的危機は、ブルジョア支配階級をして必死の侵略、反革命、権力再編攻撃の毒牙を全世界人民の前に露呈せしめている。

かかる情勢の中には、もっと重要な点は、諸帝国主義の侵略反革命、権力再編攻撃に対し、アジアでも中東でも後進国革命勢力が民族解放・社会主義革命の旗を固く守り發展させつつあるという現実である。帝国主義が資本主義社会の防衛に、そして「スターリニスト国家」が、これとの蜜月に奔走しながらも、敢然として世界革命の趨勢は、武装解放勢力による社会主義の勝利へと突き進みつつあるのだ。

こうした革命闘争の世界的前進の趨勢は、東アジアを、とりわけ朝鮮半島を反革命との激突戦の鋭い一環としている。そしてかかる情勢を敏感に反映し、反革命策動に躍起となつてゐるのが、「韓国」朴独裁政権であり、「韓国」を生命線とした日本帝国主義であり、そして米帝国主義である。

今年四月の宮沢訪米における六九年「日米共同声明」の「韓国条項」に就いての再確認

発言、八月三木訪米における日帝のアジア反革命盟主の役割の確認、そして八月末のシェ

レジンジャー米国防長官の訪「韓」来日、防衛庁長官坂田との会談は、三八度線による南北固定化を前提とし、アジアの革命勢力の圧殺を目論んだ「有事出撃」の確認迄も射程に入れた米日「韓」アジア反革命秩序の決定的な軍事的強化に他ならない。

まさに、朝鮮半島をはじめとしたアジア全域には、七二年以降、さらに七五年四月ペトナム、インドシナ三国人民の勝利以来、ドラスティックな階級再編が、全アジア人民の民族解放・社会主義革命闘争と日本両帝国主義の階級利害をめぐる一大攻防を形成する段階に突入している。ここにこそ、必然的にタイマレーシア・フィリピン等 ASEAN 諸国での「米国離れ傾向」が発生する根拠が存するのである。そして、そうであるが故にこそかかる傾向をそのレヴェルに止めることなく、各諸国共産主義革命勢力の民族解放・社会主義革命戦争の一層の強化と結合が要請されているのだ。

スケジュール

9・11	日「韓」閣僚會議粉碎・天皇派阻止労学総決起集会	P M 6
9・14	日「韓」閣僚會議粉碎羽田現地闘争	A M 10
9・15	日「韓」閣僚會議粉碎中央闘争	P M 6
9・30	天皇派米阻止羽田現地闘争 三里塚現地集会（予） 六郷橋緑地	P M 6

九・一五日〔韓〕閣僚會議そしてそれに統べて、日米帝・朴獨裁政権による「韓」国民党の収奪と搾取の強化、日本労働者・人民の差別・分断支配の強化、そしてアジア人民への明確な侵略反革命を意図して遂行されようとしている。従つて我々はかかる九月階級攻防において日本-アジアのプロレタリア階級の暴りもなく決意せねばならない。

つとも鋭く指摘しなければならない事実は、沖縄海洋博への皇太子派沖・九・三〇天皇派米と、そして米日「韓」反革命新秩序を象徴する如く登場した、天皇制・天皇制イデオロギー攻撃の本質である。

とともに戦前の天皇制の物質的基礎である小作人（貧農）—地主関係・漁民—網元関係を一掃した。しかし、日本帝国主義者は、四九年中國革命の勝利に示される如き、國際階級

除外主義——第2インター化潮流を
粉碎し、反帝——社会主義の大道を
爆進せよ！

この重大な決戦を目前にし共産主義者の階級的任務から逃亡する事は絶対に許されない。いや革命と反革命の時代であるが故にそ、政治党派の階級的基礎・路線が、そして自らの組織的実践と綱領内容が鋭く問われ、ふるいにかけられるのだ。

「保革連合」へ動き出した社共は、この歴史的転換期に労働者階級の体制内化を基礎とした「歴史的大妥協」路線を敷き、国内革命勢力への「破防法」弾圧をブルジョア階級―国家に要請するに至っている。こうした事態は、彼らが腐敗と墮落の極みに陥っていることを明確にさし示していると言わねばならない。日共が、アジア革命勢力に対し、一度も自がらの階級的立場を鮮明にさせることなく、「平和と民主主義」防衛の延長上に後進国階級闘争の「評価」を行ってきた事は彼らが今日の帝国主義の政治利害と根本的に一致する主義との根本的対立にまで至りつく闘いから一貫して逃亡し、帝国主義勢力の反革命包围網の一翼として自からの政治機能を発揮させつつあるのだ。

だが、こうした社共の帝国主義への屈服と排外主義潮流への純化のみならず、革マルに

闘争の前進に規定され、「天皇」そのものについて温存する一方、日本資本主義の高度成長経済を基礎とし、労働者階級の体制内化・反共民主の育成を促進してきた。そしてかかる階級支配の諸実体を総括してきたのが「戦後民主主義」に他ならない。かかる制度—階級支配様式の下で日帝は階級矛盾の累積を本工と下請・臨時工そして日雇、各企業内における職能階級制の導入、「企業共同体」意識の発揚として形成し、さらに沖縄人民への度重なる差別—同化攻撃・部落大衆、在日アジア人民への差別と抑圧分断攻撃のなかで形成してきた。この基礎の上に成立してきた戦後民主主義は、その制度的風化と解体を六〇年体後半のベトナム反戦・反帝闘争高場のなかで完了した。もはや全ゆる民主主義の擬制的外被は除かれ、帝国主義支配構造本性たる階級解体差別排外主義のむきだしの攻撃が日本人民・アジア人民への反革命攻撃としてかけられようとしている。この重大な歴史的転換期に、皇太子派沖・天皇派米が策動された

インター化潮流を 社会主義の大道を

端的に表現されるように、アジア民族解放—社会主義革命闘争を「帝・スタ」の代理戦争として断罪し、朝鮮半島の危機に帝国主義を美化した「核戦争体制反対」なる小ブル平和主義という主張・そして「連赤闘争」に革命党として直面することから逃亡し、あまつさえ「沖縄返還を失業・合理化問題」と把握し、日「韓」闘争は国内民主主義運動の延長上に「朴政権」反対としてしか位置づけ切れない

第四インター・共労党・日向派の第二インター化こそ、革命と反革命の時代の副産物であろう。

昨夏わが同盟が同盟内に宿した、ブルジョア政治に屈服する、腐敗分子を革命的に放逐した事は、革命激動期に生じる革命と反革命の根源を革命的に止揚し、革命党建設・革命勢力の建設に自からの階級的飛躍を賭けて前進せねばならないという教訓を与えた。

今や敵権力とその同伴者供は、この時期に中心とした町内会防犯会議を主催し、C.R作戦（コミュニティ・リレーションズ）を開始し、徹底的な革命勢力の分断・包囲作戦に出ている。これは、民間労働運動では先行的で戦制と御用組合執行部の企画方針の組合

闘争の前進に規定され、「天皇」そのものについて温存する一方、日本資本主義の高度成長経済を基礎とし、労働者階級の体制内化・反共民主の育成を促進してきた。そしてかかる階級支配の諸実体を総括してきたのが「戦後民主主義」に他ならない。かかる制度—階級支配様式の下で日帝は階級矛盾の累積を本工と下請・臨時工そして日雇、各企業内における職能階級制の導入、「企業共同体」意識の発揚として形成し、さらに沖縄人民への度重なる差別—同化攻撃・部落大衆、在日アジア人民への差別と抑圧分断攻撃のなかで形成してきた。この基礎の上に成立してきた戦後民主主義は、その制度的風化と解体を六〇年体後半のベトナム反戦・反帝闘争高場のなかで完了した。もはや全ゆる民主主義の擬制的外被は除かれ、帝国主義支配構造本性たる階級解体差別排外主義のむきだしの攻撃が日本人民・アジア人民への反革命攻撃としてかけられようとしている。この重大な歴史的転換期に、皇太子派沖・天皇派米が策動された

「革命か反革命か」という問いかけは、労働者階級の体制内化という現下の階級闘争に規定されるが故に、政治的突出の局面のみならず、優れて、職場・学園・地域における全ての戦闘的活動家の組織的指針となりうる段階にまで深められねばならない。全ゆる闘争の階級的分岐と、その社会主義的組織化と闘闘こそが問われているのだ。わが同盟と共に関東労闘委・都学活の革命的同志が昨秋十一月フオード来日・訪「韓」阻止闘争以来、一連の政治闘争と、各地域における解雇撤回・御用組合との闘い、企業閉鎖との闘い、そして下請・日雇闘争を推進し、鋭く日和見主義一排除主義潮流との党派闘争を担ってきた事は、まさにこの指針に基づき、革命党と革命勢力の同時一体的建設の端緒を形成したものである。

権力闘争の苛責なき展開の時代にあって、階級闘争の武装的発展は全く当然であり、日帝中枢への階級・人民の怒りは、ありとあらゆる実力的・武装的手段をもって爆発するのである。沖縄「ひめゆりの塔」で、皇太子糾弾の火炎ビンの炸裂が沖縄人民の歓呼の口笛で迎えられたようにプロレタリアート・人民は冷厳な事実から決して目をそらしたりはない。六〇年代後半の革命的大衆闘争を一步も清算する事なく、また連合赤軍闘争の敗北を真に革命党と革命勢力の建設に主体化されれた任務である。戦闘的労働者・学生諸君が

のは偶然ではない。帝国主義支配の眞実として天皇制・天皇制イデオロギーは登場しているのである。もちろんこれは三〇年代への「ラセン的回帰」などではなく、アジア一ト本の革命闘争に規定された、帝国主義支配のすぐれて今日的な攻撃形態である。われわれはこの事を肝に銘じ、日本プロレタリアート・人民の歴史的使命をかけ、九・三〇を頂点とする九月政治闘争の大爆発をかくとくしなければならない。

革命的労働者、学生は9・30天皇訪米阻止全国実行委に結集し、党と革命勢力の飛躍をかちとれ！

全ての戦闘的労働者・学生諸君、九・三〇天皇訪米阻止全国実行委員会に総力を挙げ結集せよ！わが同盟はこの革命的新政治潮流を断固支持し、この政治潮流の強化・発展に全力を傾注する。

この革命的政治潮流創出の第一の意義は、六〇年代後半の革命的大衆闘争を清算し、連の爆弾闘争・連赤闘争に真に答える事なく、罵詈雑言をなげかけ、小ブル急進主義なる「批判」の対置をもつて自らの戦線逃亡を陰蔽し、進展するアジアの民族解放・社会主義革命闘争との同質的闘いの展開を放棄する日和見主義諸潮流との階級的分歧と、その止揚、即ち「組織された暴力と國際主義」に裏打ちされた権力闘争の組織的・実践的復権を、全国実行委は可能としている事にある。第二に、第二次ブントが六〇年代の革命的大衆闘争の波頭に立ち権力闘争の重圧を正面から引き受けたが故に、日帝の権力再編、治安弾圧の高度化の過程で喫した敗北を党的問題として理論的・実践的に切開していく点にある。それは第二次ブントに於ける階級形成主義・ゲリラ主義の傾向をその一傾向としての党派性に固定化させず、全社会的に噴出する大衆の不満とその憤激を社会主義へ組織し抜く、不抜の革命党建設の基礎を獲得していく契機である。しかし、かかる契機は、この政治潮流の自然成長性の上、あるいは、この潮流を形成する諸組織体の算術総合的結合の延長線上だけに存在するのではない。革命党建設の基礎獲得に向けたこの契機を自からの責任のもとに階

級的當為として提出する事こそが肝要なのである。

第三に以上の理由によつて唯一全国実行委のみが九・三〇天皇派米阻止戦を文字通りの全人民政治闘争として闘うる部分であることが確認されねばならない。

この三点にわたる意義を決定的に物質化させるために、今秋期政治過程に於ける最大の戦闘を「新たに十・八の戦取」として実現し抜かれなければならない。そして、この戦闘を七〇年代権力闘争に向けた全人民・プロレタリアートの最大の結節環とし、日本における一大革命勢力形成の橋頭堡として、可能な限りの力量を傾注し、闘い抜かねばならない。

労働戦線の戦闘的同志諸君！労働戦線での如何なる小さな争議であつても、今や革命と反革命の分岐を鮮明にさせる時点に到達している。

同盟政治理論機関誌「ボルシェヴィキ」創刊準備号 頒価300円

遠方派グループに対する同盟からの革命的武器の批判

第一章 「党の発想とは何か」との関連におけるレーニン

組織の歪少化と党一大政同論路線の誤謬

第二章 「党の発想」における理論的基礎としての長崎叛乱論の根本的批判

第三章 長崎私党論の党一大衆主客对立図式とレーニン組織思想の主体的歪曲

第四章 正木論文における長崎私党論のエピゴーネンとしての位相と珍発明

第五章 長崎前衛党論＝正木論文の一知半解性による同盟に対する嘲笑的批判の破綻べきか」の一知半解性による同盟に対する嘲笑的批判の破綻

6

13

22

30

30

64

47

55

55

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

ハ党一大政同路線の理論的基礎－長崎「叛乱論」「政治的共同性

6

13

22

30

64

47

55

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

ハ科学とイデオロギーの分離－宇野方法論批判と第一次

6

13

22

30

64

47

55

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

ハブンド革通主義の長崎的総括の破綻

6

13

22

30

64

47

55

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

ハ第一章 長崎叛乱論の近代主義的位相と価値形態論－サルトルの挫折と世界の無－永続運動の悲劇

6

13

22

30

64

47

55

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

ハ第三章 サルトル－長崎的相剋図式の超克とマルクス主義の世界観－唯物史観的根本的視座とはなしにか

6

13

22

30

64

47

55

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

ハ第四章 「叛乱論」の自己否定－「政治的共同性の構造」の再度

6

13

22

30

64

47

55

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

ハ第五章 おわりに－全総と全総路線を更に前進させるために

6

13

22

30

64

47

55

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

さを証明してきた。全ての戦闘的同志が自然
発生的な闘争を「雇主との闘い」に限定させ
るのではなく、プロレタリア権力闘争への不
断の再生を、徹底的に地区一職場を貫通する
闘いとして持続的に展開することにより実現
せねばならない。更にかかる闘いを民同等既
成戦線への対置に一面化することは決定的
な日和見主義一經濟主義である。そうではな
く現在の革命勢力に問われている火急の任務
はプロレタリア階級独裁の思想で武装した労
働者階級の戦闘陣型の構築であり、階級的
全人民的政治闘争にその深部で結合されだ党
の陣型構築とそれを可能とするところの武装
遊撃戦の展開なのである。既成戦線一民同勢
はプロレタリア階級独裁の思想で武装した労

働者階級の戦闘陣型の構築であり、階級的
全人民の階級的組織化へと向かう日「韓」定
期閣僚会議粉碎・天皇派米阻止闘争へ、革命
勢力の全力量を賭け、大胆かつ細心に前進せ
ねばならない。市民主義一排外主義の泥沼が、
それとも一〇・八の再生か同盟はその最も
先頭で闘い抜くことを全プロレタリア階級の
前に明らかにする。

全ての同志諸君！九・三〇全国実行委の意
義を高らかに宣言し、一切の日和見主義を打
碎き、帝国主義権力と生死を賭けた攻防に死
力を尽くし突入せよ！

△スローガン△

日米反革命臨戦体制を粉碎し 日帝打倒の革命勢力の創出をもつて新たな10／8を戦取せよ！

9／14、15 日韓定期閣僚会議粉碎

9／30 天皇派米絶対阻止－羽田現地へ進撃せよ！

☆日米両帝国主義による朝鮮反革命戦争協定を粉碎せよ！

日帝の朝鮮侵略反革命粉碎！

南北分断固定化策動粉碎！

南北革命的統一支持！

斗うアジア人民と連帯し 安保粉碎－日帝打倒の革命的潮流を戦取せよ！

天皇制・天皇制イデオロギー攻撃粉碎！

靖国・表敬法案粉碎！

沖縄人民・部落大衆への差別分断攻撃粉碎！

破防法体制・刑法改悪策動粉碎！

☆安保粉碎－日帝打倒－沖縄解放

7／17ひめゆり－白銀決起を突破口とした戦犯天皇糾弾闘争を闘い抜け！

沖縄の日米共同反革命前線基地化阻止！

皇太子－皇族の再派冲 再上陸阻止！

○なだれ打つ諸潮流の第2インター化に抗し、革命と反革命の激突の時代に勝利する戦闘体制
を構築せよ。

○「春闘構造」を解体し 帝国主義労働運動の差別一分断攻撃を粉碎する革命派労働者運動を
構築せよ！

○共産主義者同盟の旗の下、党的飛躍を賭けて今秋期階級攻防戦！9／30天皇派米阻止闘争に
勝利せよ。

党的布陣に着き、革命的労学は全国政治闘 争、9.30天皇派米阻止に向け突撃せよ！